

小児看護領域における身体抑制の実態と看護師の意識・認識調査

荒木 亜紀、神徳 規子

1. 研究目的

近年、倫理的問題とされている身体抑制（以下、抑制）の小児看護領域における動向を知るために、過去10年間の文献検索を行った。抑制方法の工夫に重点をおいた研究が多い一方で、倫理的問題に関連した研究はなく、抑制に対する看護師の認識や思い及び倫理的問題に対する認識までは明らかにならなかった。

そこで今回、抑制の実態を把握し、看護師の抑制に対する認識や思いと子どもの人権や倫理的問題に関する意識を明確にする事、さらに今後の抑制援助の方向性について示唆を得る事を目的として調査を行った。

2. 研究方法

病院要覧（全国病院名簿）で小児病棟（混合病棟含）を持つ兵庫県下の42病院を検索した。該当病院の小児（混合）病棟に勤務する看護師を対象とし、調査用紙と倫理的配慮内容を加味した協力依頼文を添付し郵送した。質問紙は無記名とし自由意志により個別郵送回収を行い434名より回答があった（回収率90%）。分析はSPSSを使用し、記述統計、因子分析、分散分析、 χ^2 検定、t検定を行い $p < 0.05$ を有意差ありとした。

3. 結果・考察

- 1) 抑制の経験：抑制経験のある看護師は全体の8割弱であった。小児専用病棟、小児看護経験年数が長いほど抑制経験者が多かった。対象は乳幼児が多く、認知力の未熟性を理由に安全確保を目的とした、管理的かつ短絡的な抑制が多い傾向が認められた。
- 2) 抑制実施に対する看護師の思い：「思い」に関する質問項目に因子分析を行い「肯定意識」群と「否定感情」群の2因子を抽出した。この2因子と「抑制の認識」「抑制経験」の各項目間との検定結果、「抑制は必要と認識」「経験有り」に「肯定意識」は有意に高かったが、「否定感情」には差がなかった。8割の看護師が抑制を必要と認識していたが、必要と認識していても抑制に対する否定の思いには差がなかった。
- 3) 子どもの人権と倫理認識：抑制に対する否定感情は持っているが、抑制が倫理的に問題であると認識していた割合は低かった。この事より、現段階では抑制が倫理的問題であると捉えられておらず、ジレンマを引き起こす状況には至っていないと考えられる。
- 4) 抑制廃止への取り組み：抑制について話し合いをしている病棟ほど抑制廃止の方向性にあり、また人権や倫理問題への認識が高い傾向にあった。廃止の方向性にある病棟は2割のみだったが、今後、抑制について話し合う事が抑制を考える契機となり、個々の看護師の抑制に対する意識や認識の向上につながると考える。

抑制への意識変革には、看護師個々と病棟の2側面から考える事、及び日頃から個人が倫理的視点を持ち意識を高めていく事が、重要なポイントになると考える。